

## 私の歩んできた道、そして文化の力

朴起兌 (パク・キテ)

私は、いま京都大学で日本の伝奇小説を研究している。伝奇小説は長い歴史を持つ幻想文学の一種であるが、ほとんどの日本人はこの言葉を聞くと「伝記」小説と理解してしまい、もう一度説明しなければならない場合もある。しかし、私が夢枕獏の『陰陽師』とか、奈須きのこの『空の境界』など、有名な著作のタイトルを挙げると、皆納得したかのように頷く。伝奇小説は、割合マイナーなジャンルとして認識されているようだ。

このエピソードを誰かに言ってみると、ほとんど同じ質問をしてくる。「朴さんは、どうして伝奇小説なんかを研究するようになったのですか」と。それについてはけっこう長い話になるので、私は「学生時代に、伝奇小説のマニアでしたから」と、簡単に答えている。しかし、ここではその理由を紙面が許す限り、もう少し長く話してみたいと思う。

韓国では、すでに1980年代から日本の大衆文化が流行り始めていた。「海賊版」という形で不法に流通していたマンガや小説もあれば、現地化されてからテレビで放映されたアニメーションもあった。その人気は、韓国が経済的に豊かになった1990年代から2000年代初頭に絶頂に達したと思われる。1987年生まれの私は、まさにそのような時代の中で生まれ育ったのである。今でも、小学生の頃見たTVアニメ『ポケットモンスター』の衝撃ははっきりと覚えている。子供の頃見たTVアニメ『ヴェルサイユのぼら』、そして一生懸命に作っていたガンダムのプラモデルの記憶。それも、一生忘れることはないだろう。

そして中学生の頃、韓国のアニメーションチャンネルでは本格的に日本のアニメーションを放映し始めた。『Cowboy Bebop』『ああっ女神さまっ』『青の6号』など、いわゆるジャパニメーションの名作が毎日のように放映され、私の世代はその洗礼を受けていた。当時は分からなかったが、今顧みるとまさに「洗礼」としか言いようがない。これらの作品をきちんと理解するため、私は一人で日本語の勉強を始めた。

ある程度日本語が読めるようになった高校時代には、当時の韓国で最高の人気作として好評を得ていた奈須きのこの『月姫』『空の境界』などを読み、初めて日本の伝奇小説に接した。特に、評論家の笠井潔が書いた『空の境界』の解説は、伝奇小説を研究するようになった最大のきっかけでもあった。その解説は「ただの小説に、こんな深い内容と背景が潜んでいたのか」ということを初めて私に実感させたのだ。余談だが、今でもその解説は、私の参考資料の中でもっとも重要なものとして取り扱われている。

もともと、中学時代までの私は歴史好きで、韓国史を勉強しようとしていた。それに、あの頃の私は偽書などにも興味を持ち、右翼史観と強い反日感情をも抱いていた。そのような私が日本の文化に触れ、やがては日本文化の研究者になったとい

うことは何を意味するのだろうか。日本を嫌い、日本語すら「艶めかしくておかしい」とまで思っていた私は、今はこのように日本に住み、日本語で論文を書いているのだ。

考えてみると、私が接してきた日本の文化は、それまでの私の考え方や趣味と衝突したのではなく、融合され、調和してきた。強いナショナリズムと右翼史観にも拘らず、私が日本の文化を受容できた理由は、そのコンテンツが純粋なエンターテインメントとして作られたからではないだろうか。もし、それに何らかの政治的意図またはイデオロギーが露骨に表れていたのなら、私はおそらく拒否感を覚えたに違いない。もちろん、笠井潔の『ヴァンパイヤー戦争』のような例外もあったが、少なくとも中学生や高校生にも読み取れるように露骨なメッセージを投げかけていたものはなかった。

なぜ強いナショナリズムと反日感情を抱いていた当時の私が、何の抵抗もなく日本のエンターテインメントを受け入れたのかは、高校時代までの疑問であった。しかし、ある日のことを切っ掛けに、その理由に気づくことになった。2005年放映され、韓国でも人気を得ていたTVアニメ『機動戦士ガンダムSEED Destiny』が、地震で放映されなかった時期があった。その際、韓国の多くの視聴者は「日本は悪い国だけど、ガンダムは早く見たい」との意見を残していた。それを見て、私はそれまで抱いていた疑問が解決されたような気がした。

現代社会において、国家と国家の関係というのは、非常に複雑なものになりつつある。私とガンダムの視聴者たちの事例からも分かるように、すでにある国家に対する感覚は多元化されているのではないか。日本は嫌い。でも、日本のアニメは好き。こういう考え方は、すでに韓国では一般的なものになっていたのである。私も、その「多元化の論理」に知らず知らずのうちに影響を受けていたのではないだろうか。こう考えると、私の歩んできた道が合理的に説明できるからだ。私も、日本という国と、日本の文化を区別して受け入れていたのだ。

日本の大衆文化は、イデオロギーや国際政治の論理とは無関係に私を日本文化の研究者に変えた。国際関係が多元化された時代に、私を含めて人々に強い影響力を行使しているのは、他でもない文化そのものである。文化の力こそ、現代国家が行使できる無形で最強の力ではないか。韓流が流行して以来、韓国が「文化強国」を標榜しているのも、当然なことである。

日本も、「クールジャパン」というキャンペーンを進行中であると聞く。私が知っている限り、これは日本の文化が持つ魅力を世界に積極的に発信することを目的にしている。その主たるコンテンツがアニメーションとマンガであることは言うまでもない。日本が「クールジャパン」キャンペーンを始めたのは、文化の力を育成し、世界的に日本の競争力を高めるためであろう。私は、それはもっともだと思う。文化の力を借りると、他の国の人に親近感を抱かせることができ、国のイメージも改善され得る。

江戸時代から、日本は文化大国として認識されてきた。ヨーロッパで流行ったジャポニズムと、戦後の大衆文化は日本が誇るべきものだと思う。それが現在の、文化大国としての日本の肯定的なイメージの形成に一助となってきたことを考えると、

これからも日本は文化の力を以って競争力を高めていかなければならない。前近代よりも、現代に文化の力はより重要になってきたからだ。

もちろん、私が生まれ育った韓国についても、同じことが言える。韓国は日本より経済発展が遅れたため、本格的に文化の力が脚光を浴び始めたのは1990年代からである。しかし、すでに1947年に文化の力の重要性が指摘されていたことは注目に値する。韓国が解放されて間もなく、臨時政府の主席で尊敬される指導者であった金九（キム・グ）が1947年に発表した「我が念願」という文で、韓国は軍事力や経済力ではなく、何よりも文化の力を重視すべきであると主張しているのだ。

金は、「我が国が世界で最も美しい国になってほしい。最も富強な国になってほしいわけではない。私が他人の侵略によって苦しんだため、我が国が他国を侵略するのは望むところではない。我々の富は我々の生活を豊かにする程度で良い。我々の軍事力は他国の侵略を許さない程度で良い。ただ、限りなく欲しているのは、高い文化の力である。文化の力は我々自身を幸せにし、さらに他人をも幸せにするからだ。私は我が国が他国のものを模倣する国にならず、このような高く新しい文化の根源になり、目標となり、模範になってほしい。そうして、真の世界の平和が我が国を通じて、そして我が国によって世界に実現されることを願う」と述べている。このような金の思想は、いま考えてみるとまさに時代を超えた卓見ではないか。

韓国は、韓流が流行して以来、次第に文化大国としての地位を確立することに成功してきた。世界でほとんど認識されていなかった韓国のイメージが、ドラマやK-POPなどの大衆文化を通じて世界中の人々にその存在感を誇り始めたのは、素晴らしいことである。韓国が軍事力や経済力を軽視しているわけではないが、ようやく文化大国としてのイメージを持つようになったことに、私は誇りを感じている。

しかし、日本にはより長い文化大国としての歴史と伝統がある。その経験は、日本の宝物であると思っている。金の視座から見ると、世界の数多くの人々が日本の文化に魅力を感じているということは、彼らと日本の人々が皆幸せになることを意味するのではないだろうか。軍事力を以って他の国と対立することは、きっと誰かを苦しめ、傷つけることとなる。経済力を高めると、その国は豊かになるが、他の国が豊かに、または幸せになることはほとんどない。悪意を持たない文化の力だけが、両方を幸せにするのだ。

学生時代の私は、日本の大衆文化によって幸せになった。日本のマンガとアニメーション、小説のない学生時代を、私は想像することすらできない。受験のストレスを解消してくれたのは、他でもない日本の「文化の力」であった。そして、私はその力に惹かれて日本の文化そのものを研究することになった。私は、私の研究によって日本の文化がより豊かになることを信じており、それがより多くの人々の幸せにも繋がるだろうことをも信じている。

人を傷つけることなく、皆が幸せになれる純粋な文化の力を、日本はその経験と歴史を活かし、積極的に高めていってほしい。そして日本だけではなく、韓国、中国、そして他の国々でも、軍事力ではなく文化の力を以って互いを理解し、幸せにする時代になってほしい。理想論ではあるが、それこそ私の念願である。